大学は新入生とどう向き合うべきか

神戸大学　教養教育院
副院長・教授　近田政博

乱痴気騒ぎは防げたのか

年度末も押し迫った3月下旬、神戸大学の非公認サークルが合宿先の旅館で乱痴気騒ぎをおこしたというニュースが飛び込んできた。室内で大騒ぎして故意に天井を壊したり、障子を破ったりする動画がSNS上で拡散していた。事態を重く受け止めた大学側は当該学生への事情聴取を行いつつ、教育担当理事が謝罪会見を開いた。現時点では学生に対する大学側の処分はまだ下されていない。

筆者自身、今回の事件からは根本的な問いをいくつか突きつけられたような気がしている。授業実施期間外にキャンパス外で学生たちが起こした事件について、大学はこれを未然に防ぐことができたのだろうか。また、大学は学生に学問を教えるだけでいいだろうか。

このような常軌を逸した行為は人間として恥ずべきということを、誰がどのようにして学生に伝え、考えさせればよいのだろうか。

残念ながら、いずれの問いにも即答するのは難しい。学生が正課外で行っている活動（サークル活動、アルバイト活動など）については、学生が届け出ている正式な大会行事などを除けば、大学はその大半を把握できていない。大学は警察ではないので、学生の日常生活を監視し、取り締まることが目的ではないからだ。つまるところ、再発を防ぐための絶対的な方法は見当たらず、学生の良識に恃むしかない。

良識は教えられるのか

大学教員は各学問分野の専門家としての評価を受けて採用されており、必ずしも人間としての良識を審査されているわけではない。ご批判を覚悟の上で私見を述べるならば、人間としての良識を教えることなどは守備範囲外だというのが、多くの大学教員の一般認識であろう。研究重視型の大学ではその傾向はいっそう強い。多くの大学教員は細分化された専門分野のなかで汲々とした日常を送っている。学生対応を教員だけに任せることは現実的ではなく、事務職員を含めた大学全体でバックアップする仕組みが必要である。

今回の事件について、4月上旬の授業初回で、「今回の事件をどうすれば抑止できたか」と100人弱の履修生に投げかけてみた。彼らもまた今回の事件で迷惑をこうむった被害者である。「良識とは義務教育段階や家庭で躾けられるべきことであり、大学で学ぶようなことではない」という意見が多く寄せられた。「大人なら個人として責任をとるべきである」とする意見もあった。学生同士だから同情的だというわけではなかった。

むしろ慎重な若者たち

意外に思われるかもしれないが、筆者の知るかぎりでは、現代の大学生は良識のない発言や行為に対してむしろ敏感であり、信頼できない相手には安易に近づかない。ネット上のリテラシーやエチケットについても一般に関心が高い。SDGs（持続可能な成長のための目標設定）、DE&I（多様性、公正性、包摂性の尊重）、LGBTQ（多様なセクシュアリティ）などの概念が普及しつつあるなかで育った現代の若者は、他者とのコミュニケーションに対して総じて慎重である。かつてコロナ禍でオンライン授業をしたとき、学生たちは大規模授業で顔出しするのを嫌がった。彼らは筆者に顔を見られることよりも、面識のない他の学生に見られることを避けたのである。

私が神戸大学での授業を通じて接する学生たちは、「偏差値が高いというだけで評価されるほど世間は甘くない」「勉強ができることと社会良識があることは別物だ」という認識を、自明のこととして受け止めているように感じる。騒ぎを起こした大学の教員としてこんなことを申し上げるのは恐縮だが、一部の学生の乱痴気騒ぎを全体の問題に敷衍するのが適当とは思えない。目立たないが誠実な学生は多いからである。

新入生は糸の切れた凧

ならば、大学は新入生に何を伝えるべきだろうか。専門教育さえ教えればそれで事足りるのであろうか。筆者はそれも間違いだと考える。なぜなら、大学新入生は大学の何たるかを知らず、混迷する世界について考える術をもたず、知的議論や論理的思考のトレーニングが不足しているからである。

ところが、多くの大学が新入生に対して最初に行うのは履修登録の手続き論である。学問体系や各学問分野の主題、人生において大学時代がもつ意味について、誰かが青臭い「そもそも論」を語らなくていいのだろうか。今年度の神戸大学の入学式において、学長は「ぜひ先端研究にも触れて」と祝辞を述べた。しかし大学は研究の場である以前に、若者にとって人生に思いをめぐらす場でもあるのだ。

日本の大学には、新入生を初めとする低学年の学生が教員と接触する機会が絶対的に不足している。言うなれば、彼らは受験勉強という糸が切れた凧のような状態になっている。文系学部のゼミは3年次あたりから始まることが多く、理系学部の研究室配属は3年次後半あるいは4年次であることが多い。

つまり、1年次から2年次にかけて、学生と教員の接点はきわめて限られており、ほぼ放任状態になっている。そのことが今回の事件の遠因となっていないだろうか。多くの大学では初年次教育科目を設定しているものの、担当教員の個性に大きく依存している。凧の糸は誰がつなぎとめるべきなのか。

世界や大学は激変した

筆者はこの3月に拙著『学びのティップス　大学で鍛える思考法』（玉川大学出版部）の改訂版をリリースした。図らずも冒頭の事件と重なり、タイミングとしては最悪であった。しかし苦し紛れに言えば、時宜を得た出版とも言えるのではないか。2009年に出した旧版は、名古屋大学高等教育研究センターが制作した「名古屋大学新入生のためのスタディティップス」を下敷きにしている。それから15年の間に、東日本大震災があり、新型コロナウイルスの世界的まん延があり、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻があった。世界は大きく変わったが、世相はむしろ暗くなったのではないか。

筆者は2014年に神戸大学に着任し、「初年次セミナー」という初年次教育科目の全学共通教材を作成する機会を得た。以来、大学教育の仕組みも大きく変わった。2010年代から各大学では学修支援システムが整備され、多くの学生は自分のノートパソコンやタブレットを大学に持参して授業を受ける時代になった。

また、コロナ禍においてオンライン授業が急速に普及し、授業の趣旨に応じて対面とオンラインを使い分けて個別最適化を図る時代となった。これらの動向が学生の成長に本当に資するものなのかどうか、筆者にはよく判断がつかない。ともかくも大学生は変動の激しい日常を生きている。

シェルターとしての大学

さて、欧米の初年次教育では新入生を自立・自律的な存在に育てることを重視するが、本当にそれだけでいいのだろうか。現実世界は天変地異など、個人の力ではいかんともしがたいことの連続である。世間はそもそも理不尽の塊なので、個人の努力が報われないことも日常茶飯事である。学生の自己責任を強調しすぎると、人生経験の少ない彼らは、加減がわからずに事態を深刻に抱え込んでしまう恐れもある。理不尽なことを受け流し、適度に相互依存し、助け合う関係性を築く方が現実的なこともあるだろう。

大学は段階を踏んで学生を育成する温室のような存在である。過度の促成栽培は作物を腐らせたり、栄養価を損ねたりするので注意が必要だが、温室には暴風雨から作物を守るシェルターとしての効用もあるだろう。